# 十三夜

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十三夜

【Nコード】
N3596L

【作者名】
阿波野治

【あらすじ】
十三夜の月が浮かぶ夜に、公園であったお話。

町外れの銭湯の近くに、実に美味いたこ焼き屋がある。先日、自宅の風呂が故障して銭湯を訪れた際、偶然に発見した店だ。それ以来、風呂が直ってからも銭湯に足を運び、入浴後にたこ焼きを買って帰るのが日課のようになった。

その店のたこ焼きの美味しさは特筆するに価する。語彙が貧困なので月並みな表現しか出来ないが、外はカリッとしていて、内側はトロッと柔らかい。中に入っているタコは大きいし、ソースや削り節がたっぷりとかかっているのも嬉しい。今まで食べたたこ焼きの中で一番美味しいのではないかと思う。この味だけは何度食べても飽きることがない。

ある晩夏の夜、いつものように銭湯へ赴き、風呂上がりにたこ焼き屋に行くと、この時間帯には珍しく先客がいた。スーツ姿の若い女性だった。ＯＬだろう。スタイルも器量も十人並み以上の魅力的な女性だ。

「残業に時間とられちゃって、ご飯をまだ食べれてないから、今日はこれを晩ご飯にしようと」

「そりゃあ大変だねぇ。でも、たこ焼きだけでお腹いっぱいになる？」

「はい。疲れてて何だか食欲もあまりないし、何かお腹に入れたらさっさと寝ちゃおうかと。明日も早いんで……」

今までこの女性と出会したことはなかったが、店主と親しそうに話しているところを見るに、どうやら常連客らしい。美人が愛想のいい感じで歯切れよく喋る姿は、見ていて清々しいものだった。

彼女は店主からたこ焼きの入った袋を受け取ると、ヒールを響かせて公園の方向へ去っていった。私もたこ焼きを購入し、彼女と同じ方角に向かって足を進めた。別に彼女の跡をつけようとか、そういう邪な考えがあったわけではない。自宅の方向が彼女と同じだっ

たのだ。
　公園は不気味な静けさに包まれていた。夜空こそ月と星が出ていて明るいが、遊歩道の両側にある植え込みから外側は闇と溶け合っていて、見通しが全く効かない。時折思い出したように吹き抜ける秋の気配漂う涼やかな風に煽られて、あたかも不吉な未来を暗示するかのように木々の枝葉が不穏にざわめく。今夜に限って、一体どうしたというのだろう。その薄気味悪さといったら、この夜道を通り慣れている私でさえ、漠然とした不安感を覚えたほどだ。
　しばらく歩くと、前方に女の人が歩いているのが見えた。足音に気がついたのか、女性が振り返った。たこ焼き屋で見かけたあのOLだった。
　不味いことになったな、と私は思った。妙齢の美人である彼女が、夜の人気のない公園に二人きりという状況下において、付き従うように後方を歩いている私に対して警戒心を抱かない道理がなかったからだ。ましてや私と彼女はたこ焼き屋で顔を合わせている。自意識過剰になるわけではないが、最悪、ストーカー行為を働いている嫌疑をかけられる可能性だってあるかもしれない。
　案の定、彼女は頻繁にこちらを振り返りだした。歩行速度もいくらか速まったようである。
　彼女が私のことを不審者だと思っているならば、それは全くの誤解だ。私には彼女に魔手を及ぼそうという腹積もりは毛頭ない。たこ焼き屋から帰宅する場合において、この公園の一本道を通行するのが最も近道になるからそこを通っている、ただそれだけの話なのだ。警戒心を抱く心理は理解できるが、疑いをかけられている立場からしてみれば甚だ不本意だ。
　彼女は歩くのが遅いようなので、いっそのこと走って追い抜いてしまおうかとも考えたが、急速に接近を試みたことが誤解を与える結果に繋がってしまっては面白くない。気まずい空気を回避するためだけに大回りして帰るのは尚のこと馬鹿らしい。
　斯様にほとほと困っていたところ、歩道の脇に設置されているベ

ンチに目が留まって、私は妙案を閃いた。歩くことを一旦中断し、時間稼ぎがてらベンチに座ってたこ焼きを食べていれば、その間に彼女は必然的に私から離れてくれる、そう考えたのだ。幸い、今夜は風が出て大分涼しい気象になっている。偶には外で食べるのも悪くないかもしれない。

ベンチに腰を下ろし、早速パックを開けて一つ口に運ぶ。相変わらず美味い。上空を仰ぐと、上品な十三夜の月が輝いている。それを眺めながら黙々とたこ焼きを食す。小腹が満ちていく内に、夜の公園の空恐ろしさなど忘却してしまった。月を見上げながら美味いものを食べるというのも中々乙なものである。

最後の一個を食べ終えた時、左手から慌ただしい靴音が聞こえてきた。振り向くと、一人の男がこちらへと走ってくるのが見えた。ボトムスの前部が閉まっていないようで、それを走りながら直そうとしているため、走り方が不自然なものになっていた。立ち小便をしていたなら足を止めた状態でファスナーを閉め直せばいいものを、何をそんなに慌てているのだろう。

男と視線が合致した。すると男は突然踵を返し、逃げるように走り去っていった。妙な男だとは思ったが、深追いしてまで不可解な行動の真意を問い質す必要性は見出せなかったので、跡を追うことはしなかった。

そんなことよりも、熱いたこ焼きを食べたせいで喉が乾いた。飲料の自動販売機を求めて再び歩行を開始する。一分ほど歩くと目的のそれを見つけた。一枚の百円硬貨と二枚の十円硬貨を投入し、ポカリスエットを選んでボタンを押す。

ジュースが落下して鈍い音を立てたと同時に、私は自販機の横の植え込みに異変を発見した。枝の一部が折れ、何者かがそこを半ば無理矢理に通行した形跡が認められるのである。

腰を屈めてジュースを取り出しながら、何気なく植え込みの内側を覗き込んで、思わず息を呑んだ。——暗がりに人が仰向けに倒れている。女性だ。私の前を歩いていた、あのＯＬだ。外傷は認めら

れないが、ショーツが足首まで下ろされて陰部が露わになり、たくし上げられたブラジャーの下に豊満な白い二つの膨らみがさらけ出されていた。十三夜の浮かぶ夜空を真っ直ぐに捉えた双眸は虚ろで、身動き一つしない。

　彼女の痛ましい有り様と、先刻の不審な男を照らし合わせて考えれば、被害者本人の口から直接聞かずとも、彼女がどのような被害に遭ったのかは痛いほどに理解できた。

　せめて大丈夫ですかと声をかけ、上着を掛けてあげるべきなのかもしれなかったが、私の胸にその意欲が生じることはなかった。それは彼女に悪い誤解を与える可能性を憂慮することが原因ではなく、偏に彼女を気の毒に思う気持ちに起因していた。

　私はその場を静かに立ち去った。

　彼女はこのあと、やがて仰向けの姿勢から上体を起こし、着衣の乱れを直して立ち上がり、何事もなかったように帰宅したあと、遅い夕食としてたこ焼きを食べるのだろうか。そして、次回からも今日と同じような調子で、あの銭湯の近場の店までたこ焼きを買いに行くのだろうか。

　月下の公園を歩きながら、冷ややかな夜風に吹かれながら、仄かに甘い冷水を乾いた喉に流し込みながら、そのようなことを私は考えていた。

（後書き）

みんなも夜道には気をつけてね
私は一日中部屋にこもってるから関係ないけど

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3596l/

十三夜

2010年10月8日15時03分発行